



昭和44年(1969年)

1 月号 (No. 283)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

行事	
年次晩餐会	1
三田会長あいさつ	1
永年会員紹介	2
名誉会員に松方三郎氏	2
この一本展目録	2
橋端超氏死去	2
この一本展解題	3
第七回海外登山研究会	5
今後の目標	6
日本山岳協会海外登山審議委員会	6
国際山岳連盟旅日記	6
第九回登山技術講習会	6
祥会だより	7
飯豊山行の石川光春先生	7
藤島 玄	7
ケルバン博士講演会	8
「越後の国境」出版	8
会員通信	
ギャルツエンの末亡人	9
千葉県に転住	9
帰国ごあいさつ	9
JAC会員章の作者	9
図書室だより	
新刊図書受入報告	9
定期刊行物受入報告	9
退任ごあいさつ	10
会務報告	
十二月常務理事会	10
十二月理事評議員会	10

昭和四十三年度年次晩餐会

昭和四十三年度年次晩餐会は、十二月六日午後六時五十分から平河町マツヤサロンで行なわれた。マツヤサロンのロビーを利用して恒例の「この一本展」「委託図書即売コーナー」「バー」など特設され、食事の始まる前から続々とつめかける会員で大変な賑やかさであった。図書即売コーナーでは新

しい「山日記」やJACの略章、クラブ・タイなどがどんどん売れ、係りは大いそがし、「この一本展」の机のまわりも、目録とくびき引きで眺める熱心な会員で人垣が出来た。ことに島田巽さんの出品された故辻村氏の写真帖や、松方さんの出品された河口禁海のスクラップ・ブック、吉沢さんの持ち

帰ったおし葉をつけたサイン帖などは、よくもこんなものが皆感嘆することしきりであった。バーでは一杯二百円のハイボールや、マチニなど沢山出て気分は次第に盛り上ってくる。定刻を少し過ぎて席につくとき、会長、副会長以下理事諸公がずらりと入口に並び、参加者に敬意を表したのも新しい趣向であった。これはイギリス式だそう。

加藤泰安評議員の司会で開会、三田会長から別項のような会の現況報告と新しく名誉会員に選ばれた松方三郎氏、入会後五十一年の永年会員として中沢、田辺、岩永、加納四氏の紹介があり、近藤名誉会員の発声で乾杯後食事に移った。

飲みものはビールと日本酒で食事はフルコース。横有恒、松方三郎、後藤幹次、今西錦司、吉沢一郎、マライーニ、泉靖一、高橋照、佐藤テール、西丸震哉氏のテーブルブッシュがかった。その途中、宮崎さんら日印合同婦人登山隊の紹介とあいさつがあり、十一月下旬帰国したばかりの須田紀子さんのネパール服姿が人目を引いた。

今春の総会で会長を退任された松方三郎、副会長を退任された渡辺公平両氏が長年本会のために尽力されたことをまず心からお礼申し上げる。

会員は十二月一日現在で二千六百七十七名、うち名誉会員十五名、永年会員二十名である。本年四月以降までに百五十五名の新入会員を迎えたが、一方中村清太郎、伏見鎌次郎、小里頼忠、小林正尚、百瀬道文、田村俊夫、杉野弘泰の七名の会員が亡くなられた。

次に本年も各方面で活躍された方々に表彰、叙勲された。

伊藤弥十郎氏、第十回国立公園大会で厚生大臣表彰
増田 甲子七氏(勲二等)
大 飼 哲 夫氏(勲二等)
織 田 収氏(勲三等)
辻 村 太 郎氏(勲三等)

三田会長あいさつ要旨
岳は年度内に出る。会員名簿もすでに出来た。
諸集はウェストン祭、紅葉祭、小集と予定通り実施され、十月には新しい試みとして図書交換即売会をやった。盛会であった。図書室も整備された。

中村清太郎氏の御遺族のご意向で、四月向井ビルで遺作展を開き、売上利益の半額約四十万円を会に寄付して

集会と予定通り実施され、十月には新しい試みとして図書交換即売会をやった。盛会であった。図書室も整備された。

集会と予定通り実施され、十月には新しい試みとして図書交換即売会をやった。盛会であった。図書室も整備された。

集会と予定通り実施され、十月には新しい試みとして図書交換即売会をやった。盛会であった。図書室も整備された。

集会と予定通り実施され、十月には新しい試みとして図書交換即売会をやった。盛会であった。図書室も整備された。

が、日本ではシンコ、ゴホン、ミソ皆楽しかった。フルサトのものは本当に楽しかった(流ちょうな日本語であつた)。

最後にこの人がしゃべらないとこの会がおさまらないと司会者に指名された藤島敏男氏は「泰安などというおかしな奴と知りあひになつたのが運のつきだ。来年はメーデーブルなど作らないで欲しい。となりの日高さんが欠席したので、植さんとさして話をしなければならぬのはこまつたことである。最近「山」に「一會員の登山白書」「ありそうで無いもの」「三界に山なし」と三つ原稿を書いたものであつた。自分を感じていることは全部書いてある。私も来年は永年會員。メーデーブルからでなく話を申し上げたい。」と相変らず元気に毒舌をはかれた。

野上、大橋氏ら図書委員の方々、受け付けや図書販売に協力していただいた小倉童子、折井正子、武田育子、武田満子、斎藤かつら氏その他の婦人部の方々、それに事務局の御一同にお礼申し上げる。(山崎安治)▽出席者 青木一夫、青田実、安彦六郎、有馬國雄、網蔵志朗、安間荘、今

永年會員紹介

ことし(四十三年)は次の四氏が永年會員となり十二月六日の年次晩餐会の席上発表され、銀まきの本会バッジが贈られた。

中沢真二氏 明治二十四年九月生れ七十七歳。大正七年八月入会、會員番号六二三番。東大で別宮元会長と同期。学生時代南アルプス、黒部、立山方面に登る。東電入社以後はスキー程度だったと御本人の話。

岩永信雄氏 明治二十八年八月生れ大正七年八月入会、會員番号六二八番。五高から東大入会、中学時代から登

井雄二、今井喜美子、今井嘉道、今西錦司、今井田研二郎、岩崎三郎、岩永信雄、岩間利美、石原憲治、飯野亨、井上綱、伊倉剛三、泉靖一、上田亮吉、遠藤登、小倉茂輝、小倉童子、小原佑一、折井健一、折井正子、大塚博美、大橋晋、大貫良一、荻野恭一、荻野和夫、岡本竜行、岡部浩子、奥川雪江、往古豊秀、織内信彦、加藤泰安、加治甚吾、河村栄二、神谷恭、神原達、川森左智子、鎌内章、亀井公、金坂一郎、風見武秀、片山英一、菊池修身、菊地文雄、木下是雄、工案英司、限藤恵子、黒柳満義、黒石恒、見学孝、近藤孝、近藤恒雄、近藤茂吉、後藤幹次、小林猛臣、小林智明、小山勝司、小平深、佐藤佳年、佐藤テル、佐藤隆太郎、斎藤桂、坂本矩祥、坂倉登喜子、松井信雄、沢村幸藏、作美修、島田巽、進藤波男、鈴木昭、杉山孝、杉本義信、須田紀子、瀬名貞利、高橋寛久、高橋照高、高田真哉、高田光政、高山忠朗、田崎市松、武田満子、武田育子、竹田寛次、田辺主計、田口三郎助、伊達寛郎、丹部節雄、滝島清、辰口幸、谷口現吉、宅間清子、陳光漢、荻谷東海、津田周二、鶴岡元之助、鶴見敏彦、富田英夫

山を始め、冠松次郎、別宮氏らと秩父黒部の山々を登り、積雪期の東北朝日連峰を開拓する。

田辺多聞氏 明治三十一年二月生れ七十歳。大正七年八月入会、會員番号六二五番。田辺主計氏の実弟。三高、東大を出て終戦まで朝鮮におられた。登山は三高時代北アルプスを中心に登る。

加納一郎氏 明治三十一年七月生れ七十歳。大正七年十月入会、會員番号六三四番。北大当時よりスキー登山で活躍、雑誌ケルンの編集や、極地関係の著書、訳書がたぐさある。

徳永芳雄、外山義夫、殿岡勝紀、中沢真二、中河与一、名須川浩、中西豊和、中島寛、中司文夫、中川武、中俣、長尾佛夫、梨羽時春、西堀泰三郎、西丸震哉、新島義昭、黄田統重、錦織保清、沼倉寛二、野口秋人、野口末延、野田憲一郎、野上成男、原田幹市、原謙一、春田俊郎、浜野吉生、羽田栄治、早川義郎、林和夫、広羽清、広瀬政美、平山武志、平柳一郎、平沢亀一郎、日下田実、ビュッラー、藤島敏男、藤島玄、藤井運平、藤波正三、深田久弥、二本信次、船越好文、福田良、古沢弥、細井信司、細川沙多子、堀田弥一、植有恒、松方三郎、牧野衛、松永敏郎、黛治也、松村寿、マライニ、三田幸夫、三島容子、三浦多美子、水野公男、宮下秀樹、宮崎英子、村井米子、村木潤次郎、村岡利夫、村尾金二、武藤晃、望月達夫、諸岡一、森宏子、山口健児、山口節子、山崎安治、山里秀男、山下久男、山内高明、山本久子、安川茂雄、山本朋三郎、山下一夫、尹官炳、吉沢一郎、吉田久兵衛、芳野超夫、芳野菊子、芳野満彦、横田敏一、横山厚夫、米永、吉坂隆正、渡辺公平、渡辺兵力、佐藤久一朗(以上百九十五名)

名譽會員に松方三郎氏

永年會員松方三郎氏は十一月の評議員会で名譽會員に推薦された。氏は明治三十二年八月一日東京生れ。学習院中等科、高等科をへて大正十一年京大経済学部卒。大正六年六月高野鷹蔵、黒木三次の紹介で入会、會員番号五四七番。大正五年燕、槍ヶ岳、大正六年針ノ木、立山、白馬岳、大正八年鳥帽子、双友、穂高、大正十四年、昭和二年欧州アルプス。ACC會員。アルプス記、アルプスと人、遠き近きなど著書がある。昭和二十一年から二十三年、三十七年から四十二年まで本会々長。

「一本」展出品目録

- Club hatten des S.A.C. 1931
Central-Comites des S.A.C.
桂川甫周「蝦夷紀聞」四冊 (藤島敏男)
目黒書店版「雪線」 (小林義正)
ノーズン・ライト(北極光) (池田錦重)
鳥海山と讃縁起と絵図 (小沢明夫)
白瀬中尉自著本「南極探検」 (古沢肇)
「北アルプスの自然」 (村井米子)
「黒部川」 (小野幸)
「御国の咄し」 (小野幸)
土井英之亮「登嶽日記」 (安川茂雄)
「一高校友會雜誌」第二百五十九号 (山崎安治)
「故山」第一輯 (山下久男)
The Mountain Scene (横田敏一)
会见芳名録 (吉沢一郎)
「印度攝影帖」 (深田久弥)
「群峰」第一号 (小味秀純)
Ariel ou la vie de Shelley
Wild Wales its people
The Scholar Gypsy (田辺主計)
ルドルフ・レシュタイラーの絵 (吉沢一郎)
Tinnere alpina tria
河口慧海「西藏経歴論」二冊
小川真一「富士山」

The Pacific Cordilla. Vol. 1-2

西徳二郎「魯国紀行(残欠)」ブルースの登山記録(一九二二年)ハント「エベレストをめざして」の点字本

鳥水のハガキ貼付「少雨莊交遊録」松岡梅軒「不二山道知留前編」辻村伊助氏の写真アルバム (島田巽)

橋端超師死去

大谷探検隊の隊員であつた橋端超師は昭和四十三年十一月四日急性心臓衰弱のため、名古屋市中区流川町の興善寺で死去した。七十八歳。十一月六日同寺で密葬が行なわれた。喪主は女婿頼嶺氏。

サンジャ・レンジの七ピークに登頂

十一月三十日カットマンズ発のUPI電報によると、スイスのマックス・アイゼリンを隊長とする六カ国の国際登山隊が、ネパール・ヒマラヤのサンジャ・レンジの七つのピークに登った。そのうちの最高峰は一九一四〇フィート(五八三メートル)であつた。この隊はスイス、西ドイツ、イギリス、スペイン、オランダ、およびアメリカの六カ国から十七人のメンバーが参加し、十一月十日から十七日までのあいだに登山した。

この一本展解題・上

Clubhütten des S. A. C. 1931.
Central-Comites des S. A. C.

スイス山岳会に所属する山小屋の図録である。この種のもは、序文によれば既に早くも一八九二年に刊行され、スイス山岳会の山小屋は、当時でも四十を数えたという。この一九三一年版には一九三七年刊行の追補別冊がついている。古くなって再建されたものや、増築されたもの、新しい写真なども採録されているが、総数百三十に近い。

小屋の位置を示す地図があり、所属支部名、建造年代、収容人員、小屋番の在否、小屋までの所要時間、小屋から登れる主な山の名、それに詳しいことを知りたい人のために、参考書目まで付記してある。山を背景にしたヒュッテの写真は、どれも眺めているだけで、楽しい。頁をくついている内に、かつて泊ったことのある小屋を見つけると、はるかにあった過去がよみがえってくる。

今宵の展覧にひらいておいたのは、松方三郎君がJAC会報第二号(昭和五年十一月)によせた「或る山小屋」の中で、お姫様の宝宝箱とでもいうのだろうか」と書いている、バルチーデル・クラウゼの小屋である。(藤島敏男)

桂川甫周「蝦夷紀聞」四冊
(写本)

―チェンパレン先生旧蔵―

桂川甫周(一七五一―一八〇九)

名は国瑞、字は公鑑、号月池。代々、和蘭外科をもって徳川幕府の侍医を勤めた。

「蝦夷紀聞」四冊は文化四年(一八〇七年)に成立をみたが、国会図書館、北海道庁等に所蔵のものがあるが、何れも写本であるところから、板行までに至っていないかも知れない。内容は、奥羽津軽藩から松前藩の蝦夷地、今の北海道に及ぶ広域の地誌というべきもので、地理・産物・生活・風俗・言語等に亘り、特に蝦夷地における記述が詳しい。岩木山、シリベシ岳、有珠岳などの山岳にも触れている。

この書の特筆とすべき理由は、チェンパレン先生の旧蔵品ということである。先生は明治六年(一八七三)に来朝、滞日四十年の久しに亘り、その間お雇い外国人として海軍大学教授、東京帝国大学文学部教授の任にあった。日本事情に明るく、著書に、*「The Japanese」*、古事記英訳、日本語文典などのほか、英文日本案内記がある。

(小林義正)

正に一本、目黒書店 雪線

「あとがき」―今日は大東亜結集国民大会なる世紀の幕が切つて落された日である。八絃為宇肇國の大精神の下……昭和十八年十一月七日「戦争末期の緊迫状態ではA4判総アートの紙一四六ページの写真集はそもそも無理だったらしい。ゼイタク出版物でなかったが、戦争に立向う青少年の剛健なる精神の糧として有難くハニコを頂戴した。続いて憲兵司令部検閲班なるところに全部の山の県名、郡名、村名、字名など報告し、その承認を得なければならなかった。やつと刊行の手順に入ったのだが、発行部数たった二千部のため斤数、標白度の揃ったアートの紙がなかった。一枚の写真、見開き二ページが左右、厚さも、白さも違う。遅れて遅れて全部の刷上りが昭和二十年四月十三日の夜は今の千代田区あたりだった。十五日に「セッセンゼンセウメグロ」なる電報。正しく灰である。当時のおきてとして市販する前に承認を受けた日本出版会に一冊提出しなればならなかった。一冊だけ既に製本の所の手を離れおった。それが『この一本』である。そして発行目黒四郎氏の御好意により、現在私の手許にある。

ノーザン・ライト(北極光)

宇宙にまで人工衛星を打ち上げる今日、飛行機による長距離飛行など珍しいことではなくなった。一九三〇年、当時ヨーロッパとアメリカ大陸を結ぶ商業飛行ルートの完成は世界的な課題であった。この本は英国の若き探検家ジノ・ワトキンスがこの飛行ルート上に最後まで未知な地域として残されていた東グリーンランドの中央部をケンブリッジ出身の若き隊員と共に、かつてシャクルトン号の最後の探検に使われたクックスト号に二台の飛行機を塔載させ、東海岸のアンマサリックを基地に大規模な七次わたる探検を展開した時の報告書である。この中にはグリーンランドの新山脈と最高峰の発見や、フォレル峰の登攀の記録もみえるが、この隊の真価はこの七次わたる探検の当時における業績はもちろんだが、この隊に参加した各隊員がのちに英国のさまざまな探検隊をリードし、大きな成果を残していったことにある。

(池田錦重)

鳥海山と緑起と絵図

一本展の趣旨からはやや外れるかも知れませんが、鳥海山の要請なので鳥海山の絵図と緑起を並べることにしました。

緑起は文化十四年(一八一七)の発行で、和讃の形をとったありきたりのものです。

絵図は天保十五年(一八四四)の木版で、幕末に近いものである程度流布したものであるが、山形の後藤幹次先生も見たことがないといわれるので、意外と気付かれずにいるものと思います。

私は吹浦口からしか登ったことがないので詳しい地理は解りませんが、山のポイントは一応押さえているようです。山麓の寺院は表口三十二ヶ寺であり、九州の阿蘇など著名な山にいくつも見られますが、現在では想像も付かない大規模な寺院があったようです。この絵図も、こういう関係から出されたものかも知れません。(小沢明夫)

白瀬 森中尉自署本

南 極 探 検

(大正二年四月五日、四版、四百ページ、博文館)

これは白瀬中尉の南極探検の報告書です。この本は学術的な報告はなにか一つ書いてなく、はじめから終りまで漢文調で、当時の青少年の士気を鼓舞するごとき文体で書かれています。たとえば、氷山何物ぞ、怒海何物ぞ、往々調子です。明治の日本人の、冒険好きで、直情で、野蠻な一面をよくあらわしているように思われます。

私はこの本を神田の古書展で見つけました。見ひらきの自署と落款はニセ物ではないと思っています。別にたし

かめたわけではありませんが、やや下りの謹直な字体は、むかしよく役場の書記とか軍人に見られた筆致です。送られた相手の辻田金蔵という人はよくわかりません。(古沢 肇)

北アルプスの自然

黒部川 一九六四年

富山大学々術調査団

日本にも生きている氷河がある。//との発見は、私たちの故国の山を想う心に、新しい宝玉を重ねた。

富山大学々術調査団のこの研究は、もっと国内の山に眼を向け、その秘宝を探れと暗示する。珍本ではないが限られた範囲に配られた本ゆえぜひ一般の日本の山を愛する人に見せたいと思つて出品する。

(昭和四十四年度第五回「この一本展」)に出品の予定で原稿を掲載いたしました。都合により出品いたしませんでしたので今年改めて出品いたします。(村井米子)

珍書にや・奇書にや

「富士山ができたときに宝永山があるんだね」

「はあ、それはなんの話ですか、先生」

「きみ、それはね、高頭さんのさしえに茨木君がかいたんだよ」

先生は武田久吉名譽会員、きみは小生なのである。小生は早速故高頭義明名譽会員あらわすところの「御国の咄し」をひもいて見た。本文百二十ページの富士誕生伝説のさしえに、オフセット版の色ずりで「ふじと琵琶湖」として右肩、あきらかに宝永山が出ている富士山があった。

現実の山をよく知っていることから、つい歴史を考えずに現状を写して

しまう。それでもたいはいの山はよからうが、富士山だけは数えきれない噴火がくりかえされ、あげくのはてに宝永年間に側噴火の大きいのが起って、あつたら八方美人のスタイルも、オジャンになってしまったのだ。が、この本のはそれ以前のことなのである。でも、そんなことにおかまひなく、今回ごらんに供します本は第四版をかき替えているのである。(小野幸)

土井英之亮誌 登嶽日記

この富士登山日記を何時何処で入手したのかはつきり覚えていない。たしか新宿辺の古書店で十年近く以前にみつけたのではないかと思う。山が富士山だけに珍らしい文獻ともいえないが、明治二十一年夏の記録であり、内容も山水紀行風に仲々モダンに書かれている。

とくに携帯品なども詳しく記され、途中フーデルなるスイス人と同行して、アルプスの自慢を聴かせられる辺り面白い。明治二十一年というウエストンが神戸に來日した年であり、松浦武四郎の死去した年でもある。土井英之亮なる著者について私は知らぬところがないが、こういった日誌としては文字も読み易く、恐らく一冊しか存在しないメモなので敢えて「この一本展」に高覧に入れる次第。(安川茂雄)

第一高等学校友会雑誌

第二百五十九号

七月中旬の愛書会の古書展をのぞいていたら、偶然すみのほうにほこりまみれでころがっているひとたばの一高校友会雑誌を見つけた。飛び飛びだが大正三年ごろからのものが数冊、それに一高旅行部々報一九二八年とい

う薄いガリ版ずりのもので混っていた。ぞくぞくと喜しくなつてしまったことはいうまでもない。古い号には藤島敏男さんの北アルプス登山記なども発表されている。それより私がびっくりしたの、第二百五十九号(大正五年十一月発行)に、あの有名な秩父破不山遭難の報告がくわしく載つていたことである。この遭難は「山之犠牲」という単行本もあり、「山岳」にも出ているが、この号は一高としての正式報告とみるべきものと思う。まことに珍しいので持参した次第である。(山崎安治)

故山 第一輯

一、著者 稲坂謙三
一、発行所 石川県大聖寺町体育協会徒歩部

本書は昭和二年九月発行、大聖寺町深田印刷部印行。十九ページ。著者は同町在住の医師、稲坂謙三氏。「白山山脚に就いて」、「江沼郡の山に就いて」の二篇からなる。

氏は大正十一年五月、立案案内佐伯平蔵氏案内とし、白山山麓の尾添村で人夫二人を雇ひ、白山大汝峯・妙法山・野谷莊司山・笠ヶ岳・大笠山・大門山までのが、越飛の国境を走破された。その記録が前者。江沼郡の山について歴史的に考察されたのが後者。なお大正十五年四月、友人と人夫一名を伴ない、藤倉、菅倉の両氏を中心に山岳界において開拓者の先駆者である同町出身の深田久弥氏の先輩格でもある。

妖 精 の 園

(山下久男)

この本は三十年前私が二高生のとき、仙台市国分町の丸善書店を通じて入手したものです。著者スマイスの詩

情豊かな写真の数々に深い感銘を受けましたが、なかでも私が最も心をひかれたのは、41ページのフェリ・アルプのクロッカスでした。私はこのクロッカスの中に身をうずめて、満天の星を眺めながら一夜を過ごしてみたいなあと思ひました。

SCENE THE MOUNTAIN

著者名 F.S. Smythe
発行所名 Adam and Charles Black (1937)

(横田敏一)

印度 撮影 帖

大谷探検隊は明治三十五年から大正三年(一九〇二—一九一四年)までの間に三回派遣されたが、その第一回は主唱者大谷光瑞自ら四人の隊員を従えて、明治三十五年八月ロンドンを出発、ロシア、西トルキスタン、カシガルを経て、パミールへ入った。パミールのダシュケルガンで二隊にわかれ、光瑞は二人の隊員と共に、ミントカ峠を越えて、フンダ、ギルギットへ出た。このルートは光瑞以前にも以後にも、まだ日本人で通った者はいない。

「印度撮影帖」(本願寺発行、明治三十七年、非売品)はその時の写真である。集中のラカボシやパツラ水河の写真は、カラコルム早期の写真として世界でも珍しいものであろう。この本がどのくらい部数が出たか知らない。私は吉田二郎君から買った。

(深田久弥)

会員芳名録

(Mountaineers Met)

このたび、日本山岳会を代表して、国際山岳連盟の総会に出席した私は、オーストリア、ドイツ、その他の国を訪れて、従来手紙の往復で親しかった多くの岳人に会い、それらの人々の署名をもらって来た。中にはこの帳面を忘れてしまったが、結果的には大変貴重なものになってしまった。

しかしこれがこのようなものになるには、アメリカ山岳会の会長ニック・クリンチの積極的な援助のあったことを忘れることが出来ない。

改めてこれを一枚一枚めくって行くとき、その日のことも目が前にマザマザと浮んで来る。緊張の連続した五日の嬉しい旅ではあったが、愉しかった思い出は永久に消えることはないと思う。(吉沢一郎)

レジュライターの絵

一九〇三年にドイツのハンス・マイヤー隊は、エクワドルのチンボラソ、ユトバーヒ、アルタール、アンティサナ、キリンダニヤ等の山々に登ったが、その時について行った画家のルドルフ・レジュライターの画いたものを印刷したのがこれらの絵である。絵はまだあるが、今日はそのうちの二〇枚だけを見て頂くことにした。上手、下手は私にはわからないが、珍しいので出してみた。

「In den Hoch Anden von Ecuador」.
Hon. Prof. Dr. Hans Meyer,
Berlin 1907, Dietrich Reimer
絵と多数の写真が別刷(Bilderalb.)

⑧) になっているのである。

群 衆 一 号

日本山岳会「この一本展」に専修大学山岳部第一号を提出出来すことを嬉しく思います。

荒廃の中から立ち上った終戦後、スイソンを喰べ、ビッケルを持っていた者はアイゼン無し。アイゼンを持っていた者はビッケル無しの山登りから始まり、若人の夢を追ひ、部の再建をめざしてがらばつております時、苦しい中から部報一号(昭和二十三年)を生み出しました。当時山岳部長だった三輪俊一先生からの巻頭の辞を山岳部の至言至上として専修大学山岳部は育つてまいりました。最近調べました所この一号の部報が、どこにも全然なく唯一冊、山岳部に残っているだけという次第になりました。はなはだ残念だと思っております。この機会に「この一本展」に提出し、皆様の中に手持ちの方があれば、喰ひついて頂くまでねばらうと考えている次第です。(小味秀純)

恒例の忘年会

恒例の忘年会は十二月十八日午後六時半から委員会で開かれた。ことしから集会委員担当が行うことにし、それに婦人部の応援を得て行った。会報に予告しただけで、特別に通知は出さなかったが、定刻をすぎてから続々と会員が集まり、三百円の会費ながら、土曜会からウイスキーの寄贈などあり、プレゼントや手紙の交換、それに山口節子さんの独唱などで、会のムードは大いに盛り上がり楽しいムードとなった。来年も続ける予定だが、会費は値上げになるかも知れない。

第七回海外登山技術研究会

11月30日～12月1日

日本山岳協会主催第七回海外技術研究会が昭和四十四年十一月三十日、十二月一日両日東京代々木のオリムピック記念青少年スポーツセンター内スポーツ研修館で行なわれた。日高山協海外登山審議委員長以下約百九十名の参加者があり、今回から川森左智子、山口節子、関口美智子、黒石恒、佐藤京子、松田柳子、芳野菊子、武田満子、宮崎英子、渡辺節子、若山美子、今井通子さんの女性が初参加した。

十一月三十日午前九時日高氏のあいさつで開会、吉沢一郎氏の「UIAA年次総会報告」、古原和美氏の「最近の高所医学」、松田雄一氏の「八千メートル登山の諸問題と対策」、深田久弥氏の「今後の目標」(別項)と題する特別講演に引き続き、午後は次の研究発表があった。

- ①ヒマラヤ研究集会一九六八年について(高山竜三)
- ②カラコルム地方における長期予報の可能性(阿部圭)
- ③ヒマラヤ気象観測と予報に関する私案(吉川文章)
- ④国産酸素供給機の現状について(川上忠)
- ⑤各国酸素供給機の性能比較について(平林克敏)
- ⑥高所医学文献について(額田敏)
- ⑦高所における体力について(小川新吉)
- ⑧アンデス一九六七における自覚

症状について(古原和美)

⑨高所における精神状態について(石川信義)

⑩高所における呼吸について(高木健太郎)

夜は午後七時から辰沼弘吉、古原和美氏の司会で、「八千メートル峰登山と高度馴化について」のバネルデスカッションを行ない、高度と酸素供給順化、症例、寒冷、男女差、意欲の各項目を討議した。

十二月一日は、午前八時半から「氣象」(吉川文章)、「酸素」(住吉仙也)、「装備・食糧」(梶本徳次郎)、「遭難対策」(谷口現吉)、「登山技術」(原真)、「探検とアドベンチャー」(深田)、「遠征マネジメント」(丹部節雄)の七つの分科会に分かれて研究会が行なわれ

今後の目標

深田久弥

ネパールの登山が解禁になり、どうなるのかという質問を受ける。日本山岳協会のエベレストも行くことは決まっているが、どういうふうにするかはまだ研究中である。ヒマラヤの登山はいろいろな点で変わってきた。少数パーティーも出かけるようになって、このころではヒマラヤに行くといっても金を出してくれるところが少なくなった。

ヒマラヤの行きかたにももう少し例的な隊があつたかと思う。一例をあげれば、登山をするとなると、まず登山趣意書というものを作り、登山の概要、隊員名、それに最後にあまり当てにならない地図をつけてある。これに見られるように一つの型にはまっています。これに破るようなものが出てきてよいのではないか。

た。午後は一時から田中栄蔵氏の「ラシタン谷の解明」に続き、二時から一九六八年度の主要な登山隊である日大のグリーンランド横断(池田錦重)愛知岳連のサルカンタイ(加藤幸彦)栃木岳連のボルネオ(阿部重男)ユングフラウのイストル・オ・ナール(佐藤京子)山岳同志会のマッターホルン北壁の冬期登山(小西政雄)の五隊の報告があり、スライドが上映された。目下計画されている明年および明後年の隊として、ネパールでは日本山岳協会東海支部(マカル)、泊山岳会(テ伊利チヨ)、関西登山会(ガネッシュヒマール)、北大(バツウラ、一九七〇年ダウラギリ四峰)電々九州(ヒムルンヒマール)、一九七〇年春は早大(ローツエシャル)、信州大(ニル

ギリ中央峰)大分岳連(ランタン・リ、キョシカ・リ)など、またカラコルム、ヒンズーグンジュは福岡岳連(テイリチミール縦走)、日本山岳会山陰支部(ルンコ)、静岡大(ヒンズーグンジュ)、京都府岳連(カンビレデイオール)、岐阜大(ウルゲント)、一ツ橋大(K12、マルビッディング)、東大(キンヤンキツシユ)などが発表された。最後にネパール解禁とカラコルム・ヒンズーグンジュへの入国問題について討議があり、盛りだくさんのスケジュールを消化した。(山崎)

山日記第三十四輯発売

山日記第三十四輯、一九六九年版が発売された。日記ページのほか、記事

引き返しているが、いずれ登るものと思う。そうしたらその次は東側から登るかも知れない。日本隊もマナスルの東峻など登る計画が出来るだろう。ヘルリッヒコフファーは遠征の神さまで、ミューンホンの医者が、ことしはめいの二十歳になる娘さんを連れ、相当上まで登り、ピキニ姿の写真などとりたりして、金集めのうまい人である。

登山は技術もさることながら、出るまでの苦勞が大切だ。マナスル、ヒマールチュリ、P29のマナスル三山はいろいろの方面から登れば、日本人にとって愉快なことだと思ふ。ヒマラヤの冬の登山ということも考えていいのではないかと。ヒンズーグンジュでも冬の計画を立てて出かけた隊もある。寒さなにかは南極や北極の体験から大したことはいやこれはひどいかも知れない。ヒマラヤの鉄の時代になったら日本のクライマーもそれをためすのは面白いだろう。しかしヒマラヤにはまだその標準がない。しかし例えばジュガー

は、JACのこのごろ(三田)、登山の基礎(渡辺)、岩と氷の山登り(原真)、山の装備(大塚)、山の医学(住吉)、山の天気(山崎)、なだれの分類名称、山岳遭難保険について、など、定価四百八十円。会員には四百三十円で本会ルームで販売している。送料別。訂正 松方氏蔵、山日記口絵ヒマラヤの写真の説明中、シニウラギントワイト三兄弟、とあるのは五兄弟、末弟のアドルフが殺されたことあるのは二番目のアドルフの誤り。また、「山の天気」(山崎)中二十七ページ行厚型とあるのは原型、二十八ページ下から三行目屋根とあるのは尾根、二十九ページ七行目裏付けている点がない、とあるのは裏付けている点が多い、の誤りにつきそれぞれ訂正します。

ル・ヒマラヤのどここの壁に登ったということを発表し、その標準を日本で作ればよい。またこれまで日本人の記録のないところに行くのも面白いだろう。ただ行って帰るのではなく、収獲を持って帰ることだ。一番いい収獲は地図を作ることである。頂上に立て、旗を立てるだけではだめだ。地図らしい形をした地図を作るのである。それには測量術を身につけることで、あの壁は百メートル、二百メートルというけれども実際はもっと少ないはずで、記述を誇張するのは後進国のくせである。ただ行って帰ってくるだけではなく、何でもいかに資料を持ち帰る必要がある。加藤泰安という人は外国に行つてパッタばかり採集してきて、それが後で学術的にも貴重なものがまじつていくことである。(第七回海外登山研究会講演要旨)

原稿募集 会報に原稿をお寄せ下さい。

日本山岳協会の海 外登山審議委員会

日本山岳協会の昭和四十三年度第一回海外登山審議委員会は十一月五日午後七時から日山協事務室で開かれた。出席者、日高信六郎委員長、高橋照、渡辺兵、堀本徳次郎、古原和美、辰沼広吉、松田雄一（委任）加藤泰安、大塚博美、村木潤次郎、近藤等、金坂一郎、深田久弥。

▽議事

一、昭和四十四年度国際スポーツ行事用外貨割当の件
(1) 申請書受理の状況九月末日付けをもって申請を締め切り、左記六団体から申請書が提出された。

- ① 日本山岳会東海支部マカール遠征隊(愛知岳連結由)一九〇〇ドル
- ② 泊山岳会ネパールヒマラヤ登山隊

68・9・19(木) 羽田発(10:30 PM) PALのチャーター機。

9・20(金) 2 AM すでに明るし。アソカリッジ(4:50 AM)現地時間10:50 AM 同発(12:05 PM)、間もなくマッキンリ山塊群を圧して聳立、南東面のルース水河が麓まで見える。3 PM 陽が沈む、6:30 PM 夜明け、アムステルダム(8:45 PM)現地時間20日7 AM、乗換えまで6時間あるので運河見学を行なう。アム発(1:15 PM)、フランクフルト(2:05 PM)ゲラルド・グーラーと空港で1時間話す。4:25 PM 発、サブツブルグ(5:30 PM)、アデルフ・デムベルガー出迎え。ホテル・キンシュトラ・ハウスに到着。

9・21(土) A・Dの家でプニ・ゾムの地図研究。

9・22(日) モツアルト博物館、地図

(富山岳連結由) 六三八九ドル
③ 関西登高会ガネッシヒマール登山隊(大阪岳連結由) 四三五〇ドル

④ 徳島大学アラスカ学術調査隊(徳島岳連結由) 四四〇〇ドル

⑤ 福岡岳連一九六九年ヒマラヤ登山隊(福岡岳連結由) 六六六六ドル

⑥ 九州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊(福岡岳連結由) 五七四〇ドル

このほか日本山岳会からは解禁許可があり次第エベレスト登山を実行に移す用意があるが、多額の外貨を使用するためスポーツ外貨は辞退したものの連絡があったこと、右六隊のうち九州大山岳会と福岡岳連隊は一般外貨を使用するため、今回の審議の対象から除外してもよいとの連絡を受けているとの報告があり、今回の審議の対象は四隊にせよとされた。

(2) ネパールへの申請をどう取り扱うかについての検討

や参考資料寄贈あり。ヘルマン・ブルル未亡人訪問、ラディッチニツクと話す。

9・23(月) お孫さんとノンベルク教会、ワサーシュビル、動物園、夜クルト戻って来た。おそくまで語り合う。

9・24(火) インスブルックへ。Ö

国際山岳連盟総会への旅日記 ①

独逸の部 吉沢一郎

AVを訪問、ハンス・ハーフナーと2時間話す。ケーブルでホテル・ゼーグリンゲン(一九〇五)へ行く。

9・25(水) 積雪7cm、下界におり、市内見学、ローゼンハイムを経てサブツブルグへ戻る。塩川悠子嬢出迎え。日程変更手続依頼。夜A老と娘訪問、女流バイオリニストに逸品ストライディバリュースでバツハのシャ

9・26(木) モツアルト・ハウス他見学。サブツブルグ(11:45 AM、列車)。ミュンヒン(1:15 PM)、DAV訪問、G・ハウザーと会見、グーラー来る。ルートボルト・ホテル泊。

9・27(金) A・リンスパウワーと市内見学。ミュンヒン(5 PM 発、ハウザー連転)、上オーストリアのシュタイアへ行く。ホテル・マイルベータ泊。

9・28(土) 市内見学、夕方からスライド。

9・29(日) 9時からÖAVの総会、M・レビッチ、E・パニス、R・ロ

申請四隊のうち三隊がネパール・ヒマラヤであるが、ネパール政府はまだ新レギレーションを作成しておらずアプリケーションを受理出来ぬ状態にある。しかし昭和四十三年八月十九日付けをもって、三十八峰に対して解禁を声明しており、高橋委員がカトマンズで確認したところ、近日中に新レギレーションが発表されるということでもあるので、この三十八峰に対しての申請は日山協として認める方針を明確にさせて審議することにした。

(3) 審議の経過と結果
① 徳島大学アラスカ学術調査隊
学術調査隊はスポーツ外貨の対象にならないので認めるわけにはいかない。ただし今後日山協としては学術調査隊であっても計画実現のために出来る限りの援助をすることを認める。

② 関西登高会ガネッシヒマール登山隊
マカールは解禁される三十八峰にはいつており、かつこの計画はすでにネパール政府の禁止以前から

山陰
ガネッシヒマールはネパール政府が解禁を声明した三十八峰には含まれていないので認めるわけにはいかない、ということで、残念ながら見送ることに決定。

③ 泊山岳会ネパール・ヒマラヤ登山隊
北ニルギリ峰の東峰ということであり、ニルギリ峰はネパール政府が解禁を声明している三十八峰に含まれていないので審議の対象に入らぬ。同隊はすでに偵察も完了しており、準備もかなり進捗していることが認められたので推薦に決定。

④ 日本山岳会東海支部マカール遠征隊
マカールは解禁される三十八峰にはいつており、かつこの計画はすでにネパール政府の禁止以前から

一ター(有名な山岳書出版者)等に会う。シュタイア(2:30 PM)、ミュンヒン(5:40 PM)。同発(6:30 PM 列車)、シュツットガルト(9:40 PM)、W・フレイ出迎え。デューピングゲンへ。ホテル・オイゲン・キルナー泊。

9・30(月) テュービンゲン大学他見学、飛行機手続、列車でゲッピンゲンへ向う。フレイの両親の家泊。

10・1(火) 市長訪問、H・Kの問題研究。山小屋で30人集まり歓迎会あり。

10・2(水) 午前中シュウエービツシュ・アルプ見学。夜は皆でスライド観賞。

10・3(木) フレイの家族と別れ、シュツットガルトへ。市内見学。同発(2:38 PM)、飛行機、ヒースロウ空港(4:07 PM)、タビスストック・ホテル泊。いよいよ英国に移った。

第九回登山技術講習会 指導研究委員会

▽場所 富士山
▽期日 十一月二十一日〜二十四日
▽本部 チーフリーダー山崎安治、マネージャー小林秀雄、広谷光一郎、ドクター大森薫雄、連絡係武田育子
▽技術コーチ 松永敏郎、芳野利夫、中島寛、小沢明夫、錦織英夫、土肥正毅、平野真市、吉田宏明、中出水勲、佐藤元敏、広谷光一郎

▽受講生 関田美智子、亀井美英子、岩崎由美子、望月道子、木津奈美江、古屋睦美、斎藤かつら、佐藤知子、古屋知子、瀬戸加一、飯島文雄、宮内清、五藤圭三、新谷明喜、長田義則、堀越達雄、小久保孝夫、岡田明夫、長沢誠、竹内仁、鈴木広明、福

の計画であり隊長伊藤洋平氏以下の隊も力もあり、資金の見通しもついているとのことで承認。
この結果昭和四十四年度国際スポーツ行事用外貨は日山協として
① 日本山岳会東海支部マカール遠征隊一九〇〇ドル、② 泊山岳会ネパール・ヒマラヤ登山隊六三八九ドル計二五三八九ドルを日山協に申請することにした。(本件は十一月七日の日山協常務理事会で承認された)
二、海外登山技術研究会開催の件
十一月三十日、十二月一日実施することを確認
三、ネパール登山解禁問題
ヒンズークシ、カラコルム方面の登山事情について情報の交換を行なった。

井治之、滝越之、前田尊、稲田定重、フュー・キンボール 中本憲一、佐藤昭、佐野清一

十一月十五日、本会ルームにおいて左記の講師によるレクチャー、およびバレー・編成、共同装備の割当てなどを行なう。

山崎安治氏「冬山あれこれ」松永敏郎氏「冬山の装備とポイント」大森薫雄氏「凍傷、凍死について」

十一月二十日、本会ルームにおいて食糧分配、諸注意など行なう。

十一月二十一日十八時三十分ルーム前より大型バスで出発、二十三日三十分富士五合目に到着、暗闇の中をお庭小屋に入る。

十一月二十二日九時より白草流し六合付近で雪上歩行、耐風、滑落停止などの基礎技術を練習、午後よりアンザレンしてランニンググレラーなどの基本を講習、各班に分れて研修する。夕食後、ミーティングとして山の珍談、奇談を披露、団楽した。

十一月二十三日八時よりビッケル操作、カッティング、次いでアイゼン歩行技術をサーキッド法にて行ない種々の雪斜面に対する適切なアイゼンテクニックとバランスについて講習した。午後アイゼンし完全装備の態勢で各バレーごとに登行、七合五勾付近の白草流し右岸の大斜面でスタカット、コンティニアスによる登下降の練習を行なった。適度な凍結雪斜面、快晴にめぐまれ意外なほどにテクニクを習得されたの歌を聞かされる。夜は一同に会して山の歌唱会を行なったが異色参加者ヒュー・キンボール氏のフルート独奏など和気あいあいの一時を過ぎた。

十一月二十四日最終日でもあり、午前中は各班ごとに自由行動、各班コーチの指導よろしく吉田大沢方面、仏石

流し方面、七太郎尾根方面に分れ夫々レベルに応じた練習を行なった。

午後、チーフリーダーの講評、各講師、受講生の反省会の後、出迎えにきたバスで十四時三十分一路東京へ、二十一日にルーム前で解散した。

梓会だより

茶谷 東海

大正三年海軍経理学校において田部重治教授指導の下に山岳部梓会が創立してから今年で五十五周年になる。爾来毎夏数日間主として北アルプスに登った。私が入会した大正十年は徳本峠を越えて清水屋と白骨斎藤に各二泊して霞沢（初登頂）と乗鞍峠に各一泊した。昭和十年教官として同校へ戻った。時生徒五名を連れて初の穂高縦走を試み、鳥帽子槍西穂を一週間（二日停滯）で歩いた。会員数は五百名を越えた。終戦で解散したが昭和十七年復活、その後は年次懇親会やハイキングに参加した者を広く会員とし、現在復活後の会員は百三十名内内海軍四十、防大三十五、その他五五で家族十五、女性二十四を含め八十五歳より一歳までの多彩な名が幹事として行事の計画実施に当る。会費はとらず、行事参加者は実費を負担する仕組みである。日本山岳会員の本会員は日高信六郎元会長の外、安彦六郎、朝井一男、岡村治信、

川上隆、進藤波男、浜田一馬、古沢肇、皆川孝平、村井米子、村田昭昭、山口一孝、山下一夫、若浦義弘の十三氏と小生である。

次に本年の行事を左に報告する。

一、第七回年次懇親会

十月六日（日）正午快晴の奥多摩氷川の三河屋旅館で開催した。出席者は田部会長、朝井、山口両会員等三十一名（内女性九名）で、この約半数は近くの愛宕山頂の愛宕神社に参拝した後参加した。一歳半の私の孫も歩いて山頂を極めた。

記念撮影の後、茶谷幹事より五年後の還暦梓会記念行事として、講演会、一泊ハイキング（雲取山など）、会旗、

バッジの制定、会記録の発行を提案した。ついで田部会長より明治四十二年木暮理太郎氏との雲取初登山から、五年前にレリーフ除幕のための三回目の雲取越えまでの間に登った秩父や奥多摩の山々の旅を話され満場を魅了した。前日の天候のせいしか期待していた深田久弥氏の話が聞かれなかったことを残念に思いつつ午食、自己紹介の後午後五時散会した。

二、第四回ハイキング

四月十四日（日）快晴、午前十一時御岳グループ頂上駅集合、日野虎雄、浦野寿一郎両幹事案内の下に大高山馬頭列尾根・白倉のコースを歩いた。参加者は山口会員の外女性十名を含む八十歳より八歳までの三十名の盛況である。午後三時大岳神社事務所で宮司より山菜料理の接待を受け自己紹介に花を咲かせた後バスで五日市へ向かった。

三、第五回ハイキング

十一月十八日（月）午前十時吾野駅集合、子の権現と東郷公園（秩父御岳山）を目指す。甲班は浦野日野両幹事案内で連勝会員十名小床で、バス下車、子の山に向かう。正午権現着、進

藤さんの顔ではおびを御馳走になり全山の紅葉を賞でつつ下山、二時芳延橋畔の東郷公園に着き東郷平八郎海軍大將の銅像付近の美しい楓に見とれる。

一方茶谷案内の乙班は芳延でバス下車、東郷公園山腹の御岳神社祈禱殿の落成式に参列、茶谷が三笠保存会代表として玉串を奉呈した。（東郷公園の名は、この地の故鴨下清八氏が木曾の御岳神社を信仰しその神命により自分の山に御岳神社を祀り併せて東郷乃木神社を建立し東郷乃木両大將の銅像を建設しこの地を日本民族精神昂揚の地として命名したもので、公園の入口に大きな石柱が立っているが子の権現ハイカーは大抵この石柱を見落して歩いている。）式後甲乙両班合同し、銅像前で記念撮影の後、記念殿で開催の直会に参列、乾盃の後、飛入りとして連勝氏が古式三条流気合術相、紺野海軍中将が自作詩吟を奉納した。午後三時半「他人の輝で相撲」式の懇親会を終り、バラエティーに富んだ一日の幕を閉じた。

飯豊山行の石川光春先生

藤 島 玄

「山岳」の全摘いを持って入る。入会して間もなく、鳥山悦成さんの健全社に「山岳」のバックナンバーの全部を購入する予約をして、月々送金の小刻みに入手したことが思い出される。第一年第一号はどうして入手したか忘れたが、第二号は大正十四年五月、富永重太郎と越後駒が岳、平が岳、尾瀬への山旅の前夜、大湯温泉の東家旅館の梯子段の下の方紙の中から発見したときはおかしな感じがした。三号はどうしても入手できず、昭和二十五年になって、高頭仁兵衛翁から、大平農名会員の遺品としてわけて頂いた。

飯豊山行が「山岳」に発表されたのは第一号「飯豊山行」石川光春さんが最初で、近代登山の対象として飯豊山が記載されたのもまた最初であろう。以来大平農名先生、武田久吉先生の発表があったが、石川先生の飯豊山の再訪も、その他の山の紀行もついに「山岳」にも「会報」にも見えないで終わったのである。私も長い間、心の隅に石川先生の名は記憶はしていたが、遠い昔の紀行で、参考資料として探ることもなく過ぎてしまった。

四十三年度年度晩餐会に出席の途中に上野の科学博物館の佐竹義輔先生にお目にかかり、ふと、今はもう亡くなられたであろうが、石川光春というお人は植物関係の方でありませんか、と訊ねたところ、武田久吉先生くらいのお年輩でまだ御健健であり、立派な御著書もあると、それを拝見した。

帰宅すると、石川支部の会員から、第一号の「加賀の鞍ヶ岳」高頭式の記事の複写を依頼されたのを機会に、「飯豊山行」を再読してみた。改めて明治四十二年の会員名簿をみると、いノ部に東京市下谷区谷中真島町六、石川光春と記されている。

もうこうなると、じつとして知られない。例によって失礼をかえりみず、思う事の存分を記して、現住所の豊島区千早町二二二宛に差上げた。

十二月二十日付の御返信は、意外にも、石川光春先生は去十一月二十一日に他界されたという悲しい便りであった。これがもし、一年早かったらと悔まれるが後の祭りになったのも、新潟という田舎には仕方のないことであるとはいえ、誠に残念に思った。

石川先生と御交際のあらたな会員から、この「山岳」第一号に執筆された先生について、われわれ飯豊の後輩のためにも、いろいろと会報誌上に教えていただきたいものである。

× × ×

ケルバン博士講演会①

五十嵐高志

この講演会は、国立防災科学技術センター雪害実験研究所と日本雪水学会共催で、去る昭和四十三年九月十一日に新潟県長岡市で行なわれました。

この講演内容の概略は「なだれ」に関するシンポジウムの中で、特に一般を対象に、ド・ケルバン博士 (Dr. M. de Quervain) が行なった講演をまとめたものです。

日本山岳会と直接の関係はありませんが、冬山登山を行なう場合、また、昨今のように海外登山が盛んに行なわれるようになり、だれでも海外へ行ける現在です。この種の外国の制度なども知識として、知っておれば何かと便利かと思われまします。いずれにしても参考になる点が多々あるように感じられましたので、「山」にと思って書

「越後の国境」出版

佐藤 一 栄

「山岳」第六十二年(一九六七年)に、越後の果境を探ると題して、当支部が実施した「新潟県境全踏査縦走登山」の概要報告を載せていただいたが、このほど、収集した資料と行動記録をまとめた総合報告書「越後の国境」(支部機関誌越後山岳第六号)が完成した。

内容は、全県境線六八七キロを延べ二百余日をかけて踏査縦走した、参加五十三団体(隊員五五八名)の登山記録と、隊員が見聞調査した、果境の山々にまつる歴史、伝説、風俗、産業、地質、動植物、観光、山岳語彙、登山施設の現況、新コース試案等の収獲を編集したもので、A5判本文五二

いた次第です。

なお「会報二四五号、なだれの分類、金坂一郎」を参考にしていただければ、講演内容も一層理解しやすいと存じます。

また、この講演会は、日本雪水学会創立三十周年記念事業の一つで、ド・ケルバン博士は、日本雪水学会の招きで来日して、札幌、長岡、東京でそれぞれ記念講演を行ないます。博士は現在、スイス国立雪およびなだれ研究所が、ダボス(Davos)のヴァイスフルヨッホ(Weisfluhoch)にありますが、その研究所の所長をしております。

スイスのなだれ予報組織

皆さん、私がこのたび日本に来て皆さんにお話できることは大変光栄に存じます。この講演会を計画して下さった国立防災科学技術センター雪害実験四ページ、他に写真、地図、図版約三十ページという大冊である。

昭和四十六年六月の計画発表から、同書の出版までに三年四ヶ月間を費して、ようやく越後の山男の熱意と努力が実を結んだわけであるが、支部創立二十周年の記念事業として、きわめて意義深い仕事であったと思う。

また出版の喜びに加えて、はからずも越後支部は新潟日報文化賞を受賞した。これは県内最有力紙の新潟日報社が、年間最優秀の業績をあげた、果在住の個人・団体を表彰する制度で、踏査登山の成功と、その報告書の価値が認められ、新潟県の県勢進展と、県民の文化向上に貢献したというのが授賞の理由であった。

十一月三日に藤島支部長が、代表して表彰を受けたが、これは単に当支部の栄誉というだけでなく、われわれ登

研究所および、日本雪水学会の皆さんに感謝します。なお、講演後、十六ミリ映画をお目にかけますが、その内容は講演とほぼ同じです。

一 なだれ警報の目的

アルプスは全スイスの約三分の一の面積を占めており、冬の積雪日数は海拔七〇メートル以上の場所では、八十日から百日間を越えるのが普通です。冬の最深積雪の平均値は、多くの山村や山間保護地のある海拔千五百メートル前後のところで百ないし百八十センチ、また千八百ないし二千三百メートルの森林限界のすぐ上の所では、二百ないし三百五十センチ、その極は四百五十センチに達します。こういう状況というのは、他の諸国、例えばアラスカや北日本と比較して、格別驚くほどのことではありません。しかし、山岳地域においても人口密度が高

山者の行為が社会的に認められたという意味からも、新潟県登山界の大きな朗報といえようし、これで踏査に参加した多くの隊員の苦勞に、いささかも報いることができた。関係者一同は喜んでゐる。

支部としては、この報告書を県内は勿論、広く山を愛する人々に読んでいただいて、忌憚のない御批判を仰ぐとともに、これを機会に越後の山に対する認識と親しみを、さらに深めてくださることを願っている。

今回の山行を通じて、私たちは郷土の山、日本の自然について、まだまだ知らないところが少なかったのだと実感し、反省している。

御指導、御配慮を賜った日本山岳会の幹部の方々、御協力をいただいた関係各位に、当支部は心から御礼を申し上げます。

く、良く開発されているような国の場合が問題であります。

ヨハネス・コッツ(Johannes Coetz)が一九〇一年(注・この年コッツがなだれ地図を作成した)に製作した昔のなだれ地図には、六千余カ所の大なだれ走路が示されています。しかし、これらの地図は、なだれ問題の一般的尺度を示しているかも知れませんが、正確な現況を示しているものではありません。というものは、われわれは積雪深が最大であるということや、良く知られているなだれ走路などというものが、なだれ危険を判定するための主要な要素ではないということ、良く知っているからであります。

スイスでは、毎年、二十五名ほどの人々が、なだれで命を失っています。交通事故の死者数に較べた数字ではないにしても、もしこの死者数を避け得るならば、あらゆる努力をつくすべきであります。このほかに、さまざまな種類の建物や施設に支障した被害、約百件の被災者についても記録されています。

一冬のなだれ被災者が、主としてスキー客か、あるいは家庭や仕事場になだれに襲われた住民かの、何れかであるということは興味深いことであります。しかも、これら両形式の災害(スキー客か、住民か)が、同一のなだれ危険の高まった期間に同時に起きることとは、滅多にないものであります。このことは、後で説明するつもりです。

もし、被害が何らかの対策方法によりなだれ被害を減少させようとするなら、以上二つの主要被災形式について考慮しなければなりません。これらの中間の場合として、鉄道、自動車、あるいはそのほかの交通機関によって危険地域を通過する人達も被災の可能性をもっています。人里離れた山腹のどこかで、なだれ危険に遭遇した人達と

危険地域に住み、あるいは働いている人達と同一の方法でなだれ危険から護るというわけにはまいりません。なだれ対策の方法は次のように区分されます。

- 一、危険な地域を避ける。
- 二、安全な場所を捜し、そこに留まる。
- 三、適当な時期を見計らって人工的になだれを起し、危険を除去する。
- 四、なだれから保護しようとする場所の背後に防御構造物を建てる。
- 五、なだれ発生区域に防御構造物(なだれ防止のための施設)を建てる。
- 四、五は長期間を対象とした問題で、この講演の主題ではありません。最初の三項目はその時、その時に応じて対処する方法で、時々刻々に変化するなだれ危険に適用すべきもので、およそ天候の推移から判断できるものであります。かくの如くなだれ力学の知識を考慮に入れ、天候の推移を観測することにより、なだれ警報を広報の形で発表することができ、次のごとき予防策を講じることができるのであります。
- 一、危険な場所を通過しようとし、あるいは通過しなければならぬ人たちは、安全な廻り道を探すでしょうし、そうでなければ家に留まるでしょう。
- 二、道路や鉄道の運行に責任を持つ人たちは、必要あれば交通止めをするでしょう。
- 三、明らかに危険になった斜面では、その区域を立入禁止にし、注意深く点検した後、火薬爆破や砲撃により、人工的になだれを落してしまします。
- 四、最後に一戸の家、あるいは全居住地域の住民の退避が必要だというような異常事態を布告します。かくの如く、なだれ警報は旅行者にばかりでなく、非常事態には住民に対しても危険を指示するのであります。

会 員 通 信

ギャルツェンの 未亡人を訪ねて

小 方 全 弘

十月四日、ブータン国境を越え、ダージリン経由で十月七日カルカッタに戻りました。テンジンはシッキムへ行っていて留守でした。ヒマヤン・マウンテニアリング・インスティテュートというところを見物しましたが、結局これはインドのもので、ネパールへ行く場合には役に立ちません。

ここでギャルツェン・ノルブの未亡人の住所を聞きましたが、だれも知りませんでした。夜になってホテルの掃除人をしてシエルバが知っていたので案内させ、すでにベッドに入っている未亡人と会いました。

彼女はやつれたようには見えませんでした、特に裕福といったところもなく、他のシエルバの家と違っているのは、壁に一杯のトロフィーやメダル、そして日本訪問の写真が飾ってあったことだけでした。私の訪問の目的は寸志を差しあげることでした。百ルピーを渡したのですが固辞されました。あいにく英語のできるシエルバが近所にいなく、うろおぼえのチベット語とネパール語で、ギャルツェン・ノルブの心に差しあげるのだと伝え無理に渡したところ急に泣き出したのでびっくりしました。彼女の英語はイエス、ソーリー、サンキューの三語だけです、が、意志は通じたように思います。とくにマキ・バラサブのことはよくおぼえていて「私の心を持って行け」という表現をしました。きつとよろしくとい

うことだと思えます。なにしろ当方がギャプラーリが貧しいので会談は三十分前後で終わりました。娘のニマさんはパンジャビーと結婚し、カルカッタに住んで幸福だということです。ダージリンへ行く人があれば訪ねてやると喜ぶと思います。

百ルピーは私にとっては大金でしたが(なによりスリー・イヤース・イン・チベットが百二十五ルピーで買えるのですから)日本人の感傷がシエルバに通じることがわかっただけで満足でした。(十一月十日、カルカッタにて)

千葉県に転住

荒 巻 広 政

このほど高齢の故をもって診療の第一線を退きました。つきましてはこの御用のない余生を郷里の千葉県に転住して過ごそうといたしました。顧みますれば大正六年秋田赤十字病院に赴任以来現在地に診療所開設通算五十一年を経過いたしました。その間まことに一方ならぬ御温情に浴し、御指導を賜わり厚く御礼申し上げます。なお十二月六日の年次晩餐会に出席ごあいさつ申し上げる予定のところ、千葉県に到着間もなく悪寒脳溢血にて倒れ、看病に寸暇もない状況になりました。各位になにとぞ宜しくお願い申し上げます。(四十三年十二月五日)

帰国ごあいさつ

須 田 紀 子

十一月二日ボンベイを出航し、最後の一人旅を楽しんでいるうちに十一月二十四日、日本に帰り着いてしまいました。熱帯地方から冬の日本に七カ月ぶりに帰って来て、からだの方がちょっと驚いているようでした。一人旅といっても、たいへん贅沢な

旅を経験してきました。これも日本山岳会の皆さまのおかげと、ここに心よりお礼申し上げます。(十二月十日)

JAC 会員章図案の作者

永 原 輝 雄

現在の会員章の図案が優秀なことは、だれもが認めるところで、英国山岳会の円形に●A.C.のものなどに比べると、はるかに美術的である。この立派な図案は一体誰が考案したのかとの、疑問を持たれる方も多かるうと思う。

最近私は武田久吉先生から、あの図案の考案者について、お話をうかがう機会を得た。それによると、現在略章になつてゐる旧会員章は、兎角の評判があつたようで、当時は日本山岳会の会員章を着ていくと、松本、大町間の信濃鐵道(私鉄)では、割引があり、また山小屋でも割引で優待してくれたよき時代であつたことである。

それを悪用して、ある会員が会員章を友人に貸したという話もあり、それやこれやで、新会員章に作りかえることになつた。新会員章決定の経緯は、会報第二四七号に松田雄一氏の「会員章覚え書」で詳しく述べられてゐる。その中に「山岳」十四年二月号に、新会員章決定の記事が引用され「本会幹事及び評議員より提出したる、数種々の考案をもちに提出したる、数多の図案中より、中村清太郎、武田久吉、梅沢親光の三幹事より成る、特別委員が選定したるもの云々」とあるが、肝心のこの図案の考案者が何人であるかは、明らかにされてゐない。

私が武田先生に「あの図案はだれが作ったものでしょうか」とおたずねしたところ「あれは実は僕が作ったのですが、数ある応募作品を三人の委員で選考した結果、あれがいいということ

になつて決つたのです。あの枠の構図形も定規を使わずハンドライティングで作つた僕の原因から、東京府立工業学校に依頼し、本会及び霧の旅会員であつた松井幹雄氏が、監督してパッジの原型を作つたのです。原因はその後山岳会で保管していたが、すでになつたことではしょう」とのお話。そこで私は重ねて、「あの図案について何かヒントを得られたのですか」とうかがつたら「独乙の何かの図案を参考にしたように思うが、JACの文字の下部をつなげたところに苦心があつた」とも申され、當時を回顧される御様子がかがわれた。

私はこれが武田先生の作と知つて、大きな発見をしたと喜んで、藤島敏男氏にお話したところ、同氏は作者が武田先生であることは以前から御存じで、確か「山岳」か会報に出ていたような気がする、とわざわざ調べて教えて下さつたところによると「山岳」第四十四年第一号小島鳥水記念号に掲載された、高野鷹蔵氏の「日本山岳会創立頃の小島さんと私」の中に、付記として会員章のことが書かれてあり、その末尾(三五五ページ)に「今のパッジは武田君の力作である」とは「きり記されてゐる」。

私は自分の不明を恥じたが、武田先生の力作の苦心談がかがえたことに、せめてもの慰めを感じた。

この図案の作者が、本会の創立者中、ただ一人今も御健在の武田先生であることは、本会として大きな誇りであり、このJACのバッジが、今後共長らく会員に親しまれることは、本会に残された貴重な記念品ともいえよう。

ある会員がこの図案を二号大の板に浮彫にした額を作り、これを先日U・I・A・A総会に、本会代表として出席された吉沢副会長が持参、その後訪

図書室だより

新刊図書の寄贈受入報告

- 渡辺公平氏寄贈 (昭43・11)
- (1) 渡辺公平、田村博著『旅情一〇〇年日本の鉄道』毎日新聞社刊 昭43・9
- 河出書房寄贈
- (1) 座右刊行会編『インド東南アジア』(世界の旅 3) 昭43・11
- 実業の日本社寄贈
- (1) 西丸震哉著『毒舌旅行』昭43・11
- 藤島玄氏寄贈
- (1) 日本山岳会越後支部編『越後山岳第六号』昭43・9 富士波出版刊
- 既刊図書の寄贈受入報告
- 藤島敏男氏寄贈
- (1) 近藤等編『世界の山々I』昭39・6 白水社刊
- 地図の寄贈受入報告
- 鈴木政孝氏寄贈
- (1) Map of Hind-Kush Korqaz and Chitum And dli Lunrho

定期刊行物受入報告

- 〔会報・部報類〕
- (1) 『日本毛樺林』No. 144~145
- (2) 『日本山岳協会会報』No. 10
- (3) 『山と雪』No. 127
- (4) 『雪と岩』No. 19
- 〔山岳雑誌〕
- (1) 『岳人』No. 267 Dec. 1968
- (2) 『ハイカー』68-12
- (3) 『FSK』68 3 (24)
- (4) 『山と溪谷』No. 363 Dec. 1948
- 〔その他〕
- (1) 大阪府山岳連盟『88 アラスカ遠征バンクーバー峰南西稜登山報告書』

- (2)新潟県登山指導委員会『昭和43年度
公認登山指導員研修会資料』
(3)『Toshiba Review』Nov. 1966
(芳野超夫氏寄贈)

Journal Arrived in Nov. 1968

1. Die Alpen Jahrgang. 44, 10.
Oct. 1968
2. Appalachia bulletin Vol. 34,
no. 9. Sept. 1968
3. Der Bergsteiger Jahrgang. 35,
Heft. 9. Sept. 1968
4. Chicago Mountaineering Club
The Newsletter Vol. 22, No. 4.
Aug. Sept. Oct. 1968
5. The Himalayan Journal Vol.
27. 66
6. La Montana No. 16, Junio '68
7. The New Zealand Alpine Jo-
urnal Vol. 22, No. 2. 1968

退任のごあいさつ

大越 聡子

早いもので、新ルーム移転後二度目の冬を迎えましたが、皆さまおかわり
ごさいせんか。その移転と共に新し
いスタートを切った図書室で手伝い
をさせて戴いてまいりましたが、健康
上の理由により、九月末日をもって辞
めさせて頂きました。

未熟ではございましたが、常に皆様
方の寛大なるご配慮を賜わりつつ過せ
ましたこと、光栄に存じます。また、
わずかでも小さな私がそで生かされ
たことを知った喜びは大で、感謝に絶
えません。図書室も、新たに良きライ
ブラリオンを迎えましたので、これか
ら一段と充実したものと信じておりま
す。

エベレスト遠征が、近い将来実現、
成功されますように、会のご発展と皆
様のご健康を、心に覚えお祈り申し上
げております。

会務報告

十一月常務理事会

- (二十七日午後六時半、本会ルーム)
- ▽出席者 吉沢、深田副会長、宮下、
丹部、山崎、広谷、飯野各常務理事、
小倉理事
 - ▽議事および報告
 - ①年次晩餐会実施細目の件
 - ②エベレスト登山の件
 - ③東海支部の年次晩餐会の件
 - ④万国博のネパール政府援助の件
 - ⑤冬期時間の件
 - ⑥日印合同登山隊報告書の件
 - ⑦富士登山講習会事後処理の件
 - ⑧その他

十二月常務理事会

- (十日午後七時、本会ルーム)
- ▽出席者 深田、吉沢副会長、大塚、
丹部、宮下、山崎、広谷、飯野各常務
理事。
 - ▽議題
 - ①ネパール万国博援助の件
 - ②エベレスト登山の件
 - ③アメリカ隊エベレスト映画の件
 - ④年次晩餐会の件
 - ⑤富士山講習会の件

海外連絡委員会

- (十一月十八日、本会ルーム)
- ▽出席者 丹部、田村、関口、鈴木、
牧野、小味、吉沢、三田、日高、神原、
松田、山口、倉知、雁部
 - ▽議事および報告

十二月理事評議会

- ①ネパール入国問題
- ②韓国山岳会への招へい状再発行
- ③吉沢副会長UIAA総会報告

- (十二日午後七時、本会ルーム)
- ▽出席者 三田会長、吉沢、深田副会
長、藤井、大塚、宮下、山崎、野上、
丹部、宮下、広谷、大貫、長尾、中島、
小倉、竹田、飯野、川森各理事、渡辺、
佐藤、石原、沼倉各評議員、牧野監事
 - ▽議事および報告
 - ①エベレスト登山の件 (人塚)
 - ②エベレスト委員会から理事会にまだ
報告がないので、次回の理事会で検討
する。
 - ③ネパールの万国博参加の件 (大塚)
 - ④ネパール政府から正式協力依頼の申
し込みがあれば検討したい。現在は松
田、田辺の二人が個人的に日ネ協会と
ともに相談に乗っている。
 - ⑤山陰支部ヒンズークシユ遠征の件
(大塚)
 - ⑥四十四年六月から八月にかけてチュ
ティゾム(六四四メートル)に登る
計画を立てている。正式のバミッシ
ョンを取って行くので、支部の行事と
して承認する。
 - ⑦東海支部晩さん会本部役員出席の件
(大塚)
 - ⑧十二月二十一日中日ビルで行なうが
三田会長と藤井常務理事に出席しても
らう。また四十四年二月八、九日北九
州支部総会に吉沢副会長が出席する。
 - ⑨富士講習会の件 (広谷)
 - ⑩十一月二十一日から二十四日まで五
合目お庭小屋でやった。好天に恵まれ
て人も大ぜい快適だった。出来た
ら残雪期も計画したい。
 - ⑪登山講演会の件 (宮下)
 - ⑫十一月九日西武百貨店でやった。聴
集約三百人であった。

- ⑦この一本展の件 (野上)
- ⑧無事に終わった。図書委員会では大
学部報の整理をした。
- ⑨会員名簿の件 (丹部)
- ⑩誤りが多いが、どんどん連絡しても
らいたい。会報に出すなり、別に印刷
するかしたい。

- ⑪年次晩餐会の件 (飯野、小倉)
- ⑫百九十五名の出席があり、三十九万
二千二百六円かかった。即売コーナ
ーではクラブタイ十六本、略章二十、
バッジ十三、ペンラント七、ペーパーナ
イフ四、山日記五十八冊、六十周年記
念パンフレット五部など四万二千二百
五十円売れた。このほか委託図書は五
万六千四百十円の売り上げがあった。
- ⑬藤島敏男名譽会員から来年永年会員
となるので自分の持っているバッジに
銀まきしてほしいと申し出があった。
今後名譽会員のバッジについても考慮
したい。
- ⑭十二月一日から三月三十日まで冬期
時間としてルームは午後八時閉室とす
る。
- ⑮日印合同登山隊の報告書作成費を日
本山岳会で援助する。
- ⑯足立画伯の画寄贈の件 (山崎)
- ⑰山岳広告の件 (竹田)
- ⑱アルパタのザイルをカナダ山岳会
に寄贈、送付の件 (吉沢)
- ⑲忘年会の件 (小倉)
- ⑳十二月十八日ルームでやる。集会委
員会担当と確認す。
- ㉑大自然を守る会の件 (川森)
- ㉒十二月十日松本でやった。高山評議
員に出席してもらった。

峯岡町二ノ一八七

ルーム誌(43・11)

- 1日(金) 晩峯岳友会例会
6日(水) 婦人懇談会、図書委員会
7日(木) 定例理事評議員会
9日(土) 講演とシンポジウム(西武百貨店)
11日(月) 登高会総会
15日(金) 登山技術講習会打合せ
18日(月) 海外連絡委員会
20日(水) 図書委員会
22日(金) エベレスト委員会
26日(火) 稲門山岳会幹事会
27日(水) 常務理事会
十一月中入室者 三三五名

足立画伯より「北穂高滝谷」の大作寄贈

このほど会員足立源一郎画伯より、一九六〇年春陽会に出品された二十五号の「北穂高滝谷」の大作をルームに寄贈されました。ルームに展示してあ

りますから御観賞下さい。

小集会のお知らせ

▽第二四八回小集会 一月二十九日午後六時半から本会ルームで、ニューギニアから帰られた会員西丸震哉氏の講演を行います。題名は「人喰い人種に喰われそだった話」です。
▽第二四九回小集会 二月十九日午後六時半からルームで宮城支部長伊達篤郎氏の「東北の山の話」を行ないます。東北の山の映画を上映する予定です。多数会員の出席をお待ちします。

婦人懇談会主催スキ一懇親会のお知らせ

▽二月一日(土) から三日(月) まで戸隠にある小倉董子さんの小屋でスキ一懇親会を行ないます。参加者は女性会員に限りま。希望者は小倉またはルームまで御申しこみ下さい。
▽三月一日(土) から三日(月) まで長野県北安曇郡白馬村咲花スキー場ヒュッテあずみで行ないます。グレンデの近くですからお子さまや男性の参加を歓迎します。参加希望者は早目に世話人の小原晴子、またはルームに御申し込み下さい。申し込み者に詳細をお知らせいたします。

学生部マラソン大会 恒例の学生部マラソン大会は、今年も十二月一日(日)に二十校百十名の参加者のもと盛大に行なわれた。成績は次のとおりであった。

- ▽団体競技 優勝 早稲田大学、②日本大学、③東京農業大学
▽個人競技 優勝 寺田(専修大学)
②千木良(学習院大学) ③古畑(日本大学)

なお賞品は東京トップ、三越、アジア記章、伊勢男商店から寄贈があった。

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい▶

昭和四十三年度
「山」編集委員

編集代表 山崎安治
委員 吉沢一、坂本矩一、松田雄一、倉知全、小方弘
担当理事

昭和四十四年一月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三一二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会
編集代表 山崎安治

頒価五十円 (233) 七四四一
振替口座東京四八二九番

印刷所 東京港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂